

研究ノート

パーソナリティー要因が外国語学習に与える影響について： 日本人英語学習者への Myers-Briggs Type Indicator (MBTI) の利用可能性

若本夏美

学芸学部・情報メディア学科

1. 個人差研究と学習者要因

近年、第二言語習得・学習研究において、教授法を含めた学習環境や言語材料・学習材料などに加え、学習者の年齢、学習動機、言語適性などの学習者要因の重要性の認識が高まってきている (Dörnyei, 2005; Skehan, 1989, 1991, 1998)。先にあげた学習者要因のうち、学習者の年齢は近年話題となっている早期英語教育の可能性と関連して (たとえば、大津&鳥飼, 2002; Patokowski, 1980など)、また学習動機については、内的-外的動機付け、統合的-道具的動機付けとの関連性から (たとえば、Gardner, Tremblay, & Masgoret, 1997; 八島, 2004など)、言語適性に関しては従来の概念を拡大して近年個人差の主要因として論じられてきている (詳しくは、Robinson, 2001, 2002)。

しかし、第二言語教師のほとんどが個人差の重要な要因であると認識している Personality (Lightbown & Spada, 1999) に関しては、その研究は多少複雑な経路をたどっている。Personality は、Neuroticism と Extroversion を構成要因とする Big-Two 説 (Eysenck & Eysenck, 1985; Eysenck, 1998) がまず提唱され、現在では Neuroticism, Extroversion, Agreeableness, Conscientiousness, Openness to experience から構成される Big-Five 説 (Barbaranelli, Capara, Rabasca, & Pastorelli, 2003; Gleitman, Fridlund, & Reisberg, 1999; McCrae & Costa, 2003) が有力な仮説として考えられてきている。しかしながら、いずれの仮説においても、最初の2つの構成要素は共通しており (Dörnyei, 2005)、特に、外向性 (Extroversion) はパーソナリティーの中で最も一般的に認

識されている構成要素であり、第二言語習得研究においても注目されてきた。

しかしながら、重要な要因であることが認められながらも、第二言語習得に関わって、これまで Personality に関する研究は数多くなされてこなかったのも事実である (Dewaele & Furnham, 1999)。それは、1970年代、カナダ・トロント大学の研究チームによる大がかりなプロジェクトとして取り組まれた “The Good Language Learner Study” の結果 (Naiman, Fröhlich, & Todesco, 1996)、外向性 (Extroversion)、そしてその対をなす、内向性 (Introversion) が英語能力に影響を与える重要な要因と結論づけられなかったことが影響している。その原因としてはいくつかの可能性が考えられるが、例えば、Speaking 能力ではなく、筆記テストで計った英語能力との関連性が追求されたこと (Dewaele & Furnham, 1999)、パーソナリティーを測定するために用いられた質問紙 (Eysenck Personality Inventory; EPI) の結果が教室におけるパーソナリティーと異なっていたという質問紙の信頼性の問題 (Naiman et al., 1996) などが重要な点であった。確かに、筆記試験では計ることのできない Speaking 能力と外向性との関連性は容易に想定されることであるが、外向的な学習者の方が必ずしも Speaking 能力に優れているわけではない。むしろ内向的な学習者の方が発音に正確であり、一方外向的な学習者になんら卓越した点が認められなかったという研究結果もある (Busch, 1982)。また、性格は、個々人の持ついわば遺伝的・生物学的特徴だけでなく、特定文化の社会的特徴も考慮に入れる必要性があり (Hofstede, 1997)、EPI など質問紙で測定するいわばもとの素質としてのパーソナリティーが様々な状況でいかに変化するかという点も考慮に入れる必要がある (坂野, 2002)。

しかし、ここで最も核心的なのは、パーソナリティーによって第二言語学習の成否が決定されるのではないかという仮説自体にあったと私は考える。彼らの研究プロジェクトのタイトル自体が示すように (“The” Good Language Learner)、Naiman et al. (1996) は外向的または内向的

The Influence of Personality Variables on Foreign Language Learning: Can We Employ the Myers-Briggs Type Indicator (MBTI) for Japanese Learners of English?

な学習者のどちらかがより言語学習においては成功するのではないかと仮定していた。しかしながら、現在の個人差研究、学習者方略研究においてはそのような考え方から、むしろ、外向性・内向性といったそれぞれの特徴を持った学習者に適切な学習方略があるはずであり、その方略セットを探求しようとする枠組みにパラダイムがシフトしてきている (Dörnyei, 2005; MacIntyre & Noels, 1994; Wakamoto, 2002)。いわば、“The” Good Language Learner から “A” Good Language Learner へのシフトである。どちらの学習者の方が優れているのかとい問よりも、むしろ、それぞれの学習者はどのようにして外国語学習に取り組んでいるのかという問いかけの方が教室での言語教授や外国語学習者に与える示唆も大きくなる。Naiman et al. (1996) らの研究成果がなされて約30年経った今、パーソナリティと外国語学習の関連性はこのような大きな岐路に立っているといえる。

このような研究の枠組みの中で、学習者が本来持っているパーソナリティについての基礎的情報を得ることは、学習者方略との関連性を検討する上でも重要である。以下、パーソナリティの中でも特に学習者の外向性・内向性のようにして測定するのか、Myers-Briggs Type Indicator (以下、MBTI と略) を中心に述べたい。

2. Myers-Briggs Type Indicator: MBTI

MBTI は、心理学者 Carl Jung の理論 (例えば、ユング, 1987) を元に1962年に Katharine C. Briggs と Isabel B. Myers 母娘によって開発改良されたもので、現在世界70ヶ国以上の国に翻訳されて普及し、カウンセリング、学校教育、進路相談などさまざまな場面において自己理解の援助、他者理解、キャリア開発等の援助に活用されている。MBTI 日本語版は、1995年に人事測定研究所 (HRR) によって翻訳出版され、現在ではその著作権を金子書房が取得しその利用に必要なトレーニングプログラムを Japan-APT (Japan Association for Psychological Type) と共同で行っている。^{1,2} 日本語版で利用可能な最新バージョンは G であるが、現在項目反応理論を取り得た英語版最新バージョンは M であり、心理学者のグループによりよりさらに信頼性・妥当性の高いバージョンが開発されている (Quenk, Hammer, & Majors, 2001)。第二言語習得研究において、はパーソナリティを測定する質問紙として、現在最もよく知られているものであり (Brown, 2001; Ehrman, 1996)、MBTI を利用した研究も増加してきて

いる (たとえば、Ehrman & Oxford, 1990)。

MBTI により、学習者は Extroverts (外向) / Introverts (内向)、Intuitive (直感) / Sensing (感覚)、Feeling (感情) / Thinking (思考)、Perceiving (知覚) / Judging (判断) の4つのセットの指標の組み合わせにより16パターンに表出することができる (Myers, MccAulley, Quenk, & Hammer, 1998)。しかし、これはあくまでも、その利用目的からも明らかであるように、分類することが自身が目的ではなく、各個人の Preference、いわば、生来の嗜好を提示し、学習者が自分自身をより良く理解するためのひとつの資料とすることがその主目的であることを再確認しておくことが重要である。APT (Association for Psychological Type) による利用倫理規定においても、その点を厳しく定めている。

では、その Preference とは一体何を意味するのであろうか。それを理解するのに最も有効な例えは、利き手による説明であろう。両手を器用に扱う人々もいるが、ほとんどの人は、右又は左利きである。これは生まれつき決まっている (タイプ論)。しかしながら、例えば右利きであったとしても、左手が使えないわけではない。事実、私自身大学生に利き手とは反対の手で自分の名前を書いてもらったことがあるが、書き上がったものを周りの友人に見せると、決して読めないということもなく、立派に書かれたものである。ただ、興味深いのは、「うまくかけない」「すらすらとかけない」「むずかしい」「じっくりこない」「奇妙な感じ」、など、書く過程で発せられるその言葉である。書くことは出来るが、好みとは反対の手を使うと、時間をかけて、じっくりと丁寧に取り組まなければならない。書けるか、書けないか (能力)、というよりはむしろ、どちらの方がより快適に実行出来るのか (好み) の問題なのである。ここに能力と好みの決定的相違がある。MBTI においても4つの二極分化の指標についてはそのような理解をしている。そして、16通りのパターンは結果的に認知スタイル (Cognitive Style) をあらわすこととなる (Ehrman, 1996)。

3. MBTI における外向性・内向性

外向的な学習者は一般的に、「社会性・社交性とみ、活動的であり、激情しやすく、話好き」と、また内向的な学習者は、「物静かで、控えめ、態度が受動的であり、落ち着いている」と定義される (Dörnyei, 2005, p. 15)。MBTI では、外向性・内向性はは、生きていくためのエ

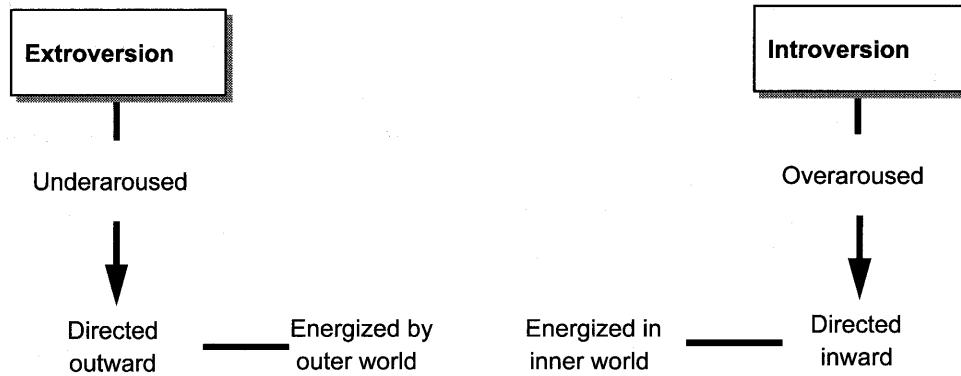


図 1. 外向性・内向性と大脳皮質の覚醒の関連 (Myers, 1998を基に改変)

表 1. MBTI における外向性・内向性の特徴 (Myers et al., 1998をもとに表に整理)

Extroversion	Introversion
Energized by ourter world	Energized in inner world
Focus on people, things	Focus on thoughts, concepts
Active	Reflective
Breadth of interest	Depth of interest
Live it, then understand it	Understand it, before living it
Interaction	Concentration
Outgoing	Inwardly directed

エネルギーの源がどこにあるかと視点からその概念を構築している。MBTI がユング理論を基にしおり、外向性・内向性を発案したのもユングであることを勘案すれば、一般的な定義と MBTI の基本概念は軌を一にするものである。その後、イギリスの心理学者 Eysenck は、ユングの概念を、大脳皮質 (cortex) の覚醒との関連で論じた (Eysenck, 1947, 1998)。図 1 に示すように、皮質の覚醒の度合いが低いのが外向的な学習者であり、低い故に、外部からの刺激により覚醒の度合いを高めようとする。

一方、内向的な学習者は覚醒の度合いが高く、外部からの刺激を求める必要がない (坂野, 1990)。Eysenck は論理的整合性から予測をしたのにとどまっていたが、fMRI (functional Magnetic Resonance Imaging) など脳性心理学の進歩により、実際に彼の予測が正しいことが証明されている (Wilson, 1990)。その結果として、外向性・内向性の特徴は以下、表 1 のようにまとめられる。

先に挙げた、外向性・内向性の一般的特徴と必ずしも一致するものではないが、エネルギーの方向性 (Energized by outer or inner world) と、その結果刺激を求める方向性 (Outgoing or inwardly directed) が最も重要な点

であり、その結果として形容詞であらわされる特徴は、以上の 2 点と相反するものはない。

MBTI を日本における外国語学習研究に利用する理由は、以上のような、ユング、Eysenck 理論との論理的整合性にもあるが、最大の理由は MBTI の日本語版が開発・利用可能なことである。EPI も研究者が個人的に翻訳し、研究に利用しているものもあるが、文化的背景により、質問項目の妥当性が揺らぐ項目もある。その意味では、単なる翻訳ではなく、日本という文化環境にあわせて、改編されている MBTI 日本語版の利用は、今後の日本における外国語学習研究に貢献する重要な質問紙となることであろう。

これまでに集積した MBTI による外向性・内向性のデータを分析し、まず日本人英語学習者の外向性・内向性の特徴を明らかにすることが、今後の研究の方向性である。

(本研究は、2003年度総合文化研究所個人研究助成金によって実現しました。助成金の交付に感謝します。)

注

- 1 詳細については、日本MBTI協会 (<http://www.nih-on-mbti-kyoukai.org/>) を参照のこと。
- 2 この認定プログラムは北米を中心に行われており、筆者は、2001年8月そのプログラムに参加し、認定ユーザーの資格を取得している。

References

- Barbaranelli, C., Capara, G. V., Rabasca, A., & Pastorelli, C. (2003). A questionnaire for measuring the Big Five in late childhood. *Personality and individual differences*, 34, 645-664.
- Brown, H. D. (2000). *Principles of language learning and teaching* (4th ed.). New York: Longman.
- Busch, D. (1982). Introversiion-extroversiion and the EFL proficiency of Japanese students. *Language Learning*, 32, 109-132.
- Dewaele, J.-M., & Furnham, A. (1999). Extraversiion: The unloved variable in applied linguistic research. *Language Learning*, 49 (3), 509-544.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner. Mahwah*, New Jersey: Lawrence Erlbaum associates.
- Ehrman, M., & Oxford, R. L. (1990). Adult language learning styles and strategies in an intensive training setting. *Modern Language Journal*, 74 (3), 311-327.
- Ehrman, M. E. (1996). *Understanding second language learning difficulties*. Thousand Oaks: SAGE Publishers, Inc.
- Eysenck, H. J. (1947). *Dimensions of personality*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- Eysenck, H. J. (1998). *Dimensions of personality*. London: Transaction Publishers.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, M. W. (1985). *Personality and individual differences*. New York: Plenum Press.
- Gardner, R., Tremblay, P. F., & Masgoret, A.-M. (1997). Toward a full model of second language learning: An empirical investigation. *The Modern Language Journal*, 81 (3), 344-362.
- Gleitman, H., Fridlund, A. H., & Reisberg, D. (1999). *Psychology* (5th ed.). New York: W. W. Norton & Company, Inc.
- Hofstede, G. (1997). *Culture and organizations: software of the mind*. New York: McGraw-Hill.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (1999). *How languages are learned* (Revised ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
- McCrae, R. R., & Costa, P. T. (2003). *Personality in adulthood: A five-factor theory perspective* (2nd ed.). New York: Guilford Press.
- MacIntyre, P., & Noels, K. A. (1994). Retrospective review article: The good language learner. *System*, 22 (2), 269-287.
- Myers, I. B. (1998). *Introduction to type* (6th ed.). Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Myers, I. B., MccAulley, M. H., Quenk, N. L., & Hammer, A. L. (1998). *MBTI Manual* (3rd ed.). Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Naiman, N., Fröhlich, M., Stern, H. H., & Todesco, A. (1996). *The good language learner*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- 大津由起雄, 鳥飼玖美子. (2002). 『小学校でなぜ英語?』. 東京: 岩波ブックレット No. 562.
- Patokowski, M. (1980). The sensitive period for the acquisition of syntax in a second language. *Language Learning*, 30 (2), 449-472.
- Quenk, N. L., Hammer, A. L., & Majors, M. S. (2001). *MBTI step II manual: Exploring the next level of type with the Myers-Briggs Type Indicator Form Q* (Third ed.). Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Robinson, P. (2001). *Cognition and second language instruction*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Robinson, P. (2002). *Individual differences and instructed language learning*. Amsterdam, the Netherlands: John Benjamins Publishing company.
- 坂野 登. (1990). 『無意識の脳心理学』東京: 青木書店.
- 坂野 登. (2002). 『自分が探せる心理学: パーソナリティとは何か』東京: 青木書店.

-
- Skehan, P. (1989). Individual differences in second language learning. London: Edward Arnold.
- Skehan, P. (1991). Individual differences in second language learning. *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 275-298.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Wakamoto, N. (2002). Language learning strategy research for the 21st century. *Bulletin of the institute for interdisciplinary studies of culture*, 19, 124-132.
- Wilson, G. D. (1990). Personality, time of day and arousal. *Personality and individual differences*, 11 (2), 153-168.
- 八島智子. (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機』大阪：関西大学出版部
- ユング. (1987). 『類型論』(林道義訳). 東京：みすず書房